



TITLE:

三つ星

AUTHOR(S):

高松, 孝治

CITATION:

高松, 孝治. 三つ星. 天界 1922, 2(16): 62-63

ISSUE DATE:

1922-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/159670>

RIGHT:

る機械裝置が設けられた。偕而鳶風船の袋は約二萬五千立方呎の容量を有して居る。故に一つの機械裝置で一日に此等の風船二つを各五百磅宛の費用を拂つて填充することが出来る。二百七十五萬立方呎の容量を有するR三十八號の様な飛行船は五十五日間の產出高が必要である。而して填充する瓦斯の費用は殆ど五萬五千磅になるだらう！。此等の數字は大層悲觀的に見ゆるがそれでも彼等は實際大なる進歩を示して居る。大戰迄ヘリウムは只だ科學上趣味あるものとしての外認められなかつた。而して輕氣球にそれを充たすといふ考は磯邊に金剛石を敷きつめることゝ全く同じ夢想的のもの——斯様に今迄言はれて居る——として考へられたであらう。

實行家は多くの研究を積んで始めてヘリウムが安價に得らるゝ様になるだらうといふことを知つて居るが併し吾人は何の心配もなく斯ういふ人々を信頼して好い——彼等の計畫が將來に於て以上の研究を功果あらしむる方向に向けられて居る様な人々を。必要だ！必要だ！いふことがなければ何も進歩しない必要に迫られて……。ヘリウムは科學上輕氣球や飛行船にとつては最も安全な氣體である。其故吾人はそれを我物としなくてはならない。それを得なければならぬ。(一九三二、一、三一、長澤 徹譯す)

三 つ 星

高 松 孝 治

周防の國の一角に、今日でも、まだ、汽車汽船は勿論、人力車さへ通ることの出来ない不便極まる一小村があります。村の人々は天文と云ふ言葉も聞いた事はありますまい。然し、瓦斯燈や電燈などの火の爲に、星の光を遮られてゐる都會の人々よりは、遙に星に親しんでをります。そして小供らはその寢物語りにも星の話を聞かされるのであります。無論星の學術名などは少しも知らず、たゞ無學な人々の目に強い印象を與へる星に自分勝手な名を附けますそれで、非常に接近して見ゆる同光度の二つの星があればそれを鰈の目と呼んだり、オリオン星座のデルタ、エプシロン、ゼタの様に三つが一直線上に同じ間隔を保つて同じやうに光つてをればこれを三つ星と稱します。この三つ星と蕎麥の根の赤いのを結びつけた傳説があります。

ある所に父母と小供四人の一家がありました。父が旅に出て居た留守中のある夜、母は末の赤ん坊が寢た時、他の三人の小供等に留守番をさせ、誰れが

來ても戸を開けないやうに申し付けておいて外出しました。すると間もなく山の婆(人喰ひ)が來て母が歸つたから戸を開けよと申しました。然し一番姉の子は母の聲と違ふから開けないと申したのですが、三人の中の一、番末の妹は母が戀ひしくてならぬものですから開けやうとせまるのです。それでは開ける前に母であるか否かをしらべて見やうと云ふので、若し山の婆であつたら手が毛だらけであると思つて手を窓からさし入れるやうに云つたのです。ところが山の婆は手に素吾の葉をまき付けて差し入れました。暗い夜の事ですから小供らはそれを柔い母の手だと合點して遂に戸を開けますと恐ろしい山の婆の姿がはいつて來ました。そして直に奥の間に行つて寢て居た赤ん坊を喰つてしまいました。そして口をもがくさせながら出て來た時、末の妹が『お婆さん何を喰べて居るのです』と尋ねますと、山の婆は小芋を喰つてゐるのだと答へました。それを知つた一番姉の子は三人で一、寸便所に行くとして裏に出て天を仰いでなきますと天から三つの籠が下りて來ました。それで三人がその籠に乗りますと不思議にも

籠は再び天へ引き上げられました。婆は小供等が歸へつて來ないので裏に出て見ますと、小供等は天に上つてゐるのです。それで非常に残念に思つて、もごせ返へせとさげんで居りますとまた、一つの籠が天から下りて來ました。得たりと婆がそれに飛び込みますと籠はまた天の方へ上つて行きました。然し中途まで來た頃に繩がぶつとりと切れて婆は籠と一緒に大地に落ちて來ました。所がその落ちて來た所は丁度蕎麥を蒔つた後で蕎麥の蒔り株がさゝらのやうに上に向いて立つて居たのです。それで婆の軀はめちやめちやになつて死んでしまいました。そしてその血に染んで蕎麥の根は今に至るまで赤いのです。そして三人の小供等は今に天に居て三つ星となつて居るのです。

ハ ガ キ

天界御送り下さいまして有難うございます。卒業期も近づいて、『寒い暑いは要するに相對性の問題です』と先生からビリツト痛い所を刺されて講義を伺ふのも終りとなりました。是非一度疎くならがちの冬の夜を望遠鏡を通して見せて戴きたうございます。

天文のお話では時々びつくりするやうな言葉が出て來ふす『我々の宇宙』思ひ切つた言葉です。機會があれば友達の前で之を使つてやらうと思つて居ます。先は御禮まで。かしこ。(歌)